資　料

ソーシャル・ビジネスに関するインタビュー調査(その２)
― NPO法人介護サービスさくらのケース ―

HALIYA AKELI
（ハリヤ アクリ）
加 藤 里 美

Ⅰ 概　　要

本資料は、2020年７月16日、博士前期課程のハリヤ・アクリと指導教員である加藤里美がNPO法人介護サービスさくらの理事長に半構造化インタビューを行った内容である。

質問項目等はAKELI・加藤（その１）に準ずる。

Ⅱ インタビュー調査

（以下、字数の関係上、ハリヤ・アクリは「ハリ」、理事長は「理長」とする）

ハリ　*なぜ現在の仕事を始められましたか。*

理長　現在副理事長をしている娘が５歳ぐらいのとき、いつも私は彼女を公園に連れて行っていました。そこに土・日しか公園に来ない若いお母さんがおられて、「いつも土・日にしかみえませんよね」と話をしたら、「私は小さな子供を連れながら働いています」と言われるのです。いろいろ話を聞いていったら、小さな子供は風邪を引いたりおなかを下したりということが多いのですけれど、そういうことって突然朝になってあるので、「休みたいという話をすると、電話の向こうから上司の「だから子持ちはあてにならないのだ」という声が聞こえてくるのですよ」と言われるので、「そういうときは私が預かってあげるから」という話をしていました。しかしよくよく考えると、病気の子供を預かると言った自分があまりにも無責任だなぁと思って、愛知県の高等技術専門校のヘルパー課に応募し、その資格を取ったことがスタートです。そういったお子さんをみるのに役に立つなと思ったわけです。でも、その学校の先生から「せっかくそういう勉強をなさったのだから、あなたがここの生徒さんを受け入れる事業をやりませんか」と言われて、「今まで働いたことも何もない

ので」と迷ったのですが、夫に相談をしたら、「やってみたら」と言われて、やってみることに決めました。ただ、やるに当たって全く知識がなかったので、本当に怖いもの知らずで、名古屋市の地域福祉課の課長さんを訪ねていきました。そうしたら、まだそのときは措置の時代だったので、「そういうものを立ち上げてくれると僕たちも助かる」と言われました。低所得者の人たちは行政がサポートするけれども、中所得者以上の人たちのところは、家政婦さんとかお手伝いさんという時代でしたので、そういうところでやっていただくとありがたいということでした。そのときの資料がありました（資料を見せてくださる）。当時にしたら値段的には高いです。昭和63年（1988年）です。こういう文言（「くらしのお手伝いをします。高齢者、障がい者、その他の在宅福祉サービス」等）も名古屋市の課長さんに教えていただいて、4,000枚ぐらい新聞と一緒に配布したのですけれども、１件の相談もなかったので、名古屋市で困っている人がいないのだと思ったのが最初でした。でも、立ち上げたのは、私のところが第一号だったみたいでしたので、名古屋市としてもすごくありがたかったようです。区長会議というのが月に１回あるのですが、その会議のときに窓口でこれを配っていただいていたのです。そうしたらいろんなところからご相談があって、出かけるようになりました。病院の付き添いみたいな仕事も入ってきました。私たちがやる仕事と、そこの家政婦さんみたいな人たちのやる仕事が全然違うのですね。私は、そこに入っている間、頭を洗ったりとか、体を清拭したりとか、足の爪を切ったりとか、少しは手足を動かしたりとか、全然休みなくやっているのですけれども、家政婦さんたちは要領がいい。24時間働くから、昼間寝ていらっしゃるのです。そういうのを見て、さくらにお願いしたいということを言われて。そのときは、私の名前の「村居」でやっていました「村居介護サービス」は、自宅で始めました。電話も車も自宅のものを使いました。任意団体として有償ボランティア活動ということで動き出しました。５年後ぐらいに「介護サービスさくら」となりました。その後、Ｓ福祉財団のＨさんらが一所懸命頑張って、2000年の介護保険に結びついていくのですが、私も1993年からＳ福祉財団のインストラクターをやっていました。そこに全国のNPOの人たちが集まってきていて、1998年

にNPO法ができたのですが、まだ私たちは法人格を取っていませんでした。
介護保険が始まったころに、もうやめた方で、○○○○の代表をしていた人がもうけようと盛んに言っているのをテレビで見ちゃったのですよ。もちろん株式会社なのですけれども。私たちはもうけようじゃなくて、困っている人たちを助けるっていう有償ボランティアなので、その人たちと肩を並べるというのが、どうしても違うなと思っていました。その前はまだ無償と有償が両方あったのですけれども、地域の助け合いをやってきた人間としては、介護保険を皆が取ったときに、名古屋市もほかのところも、法人格を取らなくても、やりたいというところがあれば、基準該当支援という形でやれますよというのがあると思ったのです。なので、基準該当で介護保険をやろうと名古屋市に申請に行ったのですが、名古屋市は基準該当をやっていませんと言われたのです。介護保険が始まったそのとき、私たちはその前の12年間に高齢者の人たちをたくさん見ていましたが、法人格を持っていない人たちが介護保険でやれなくなると、高齢者の人も満額払っていたのが１割でよくなってくると、皆１割のほうがいいので、何故さくらはそこに参入しなかったのかとなります。その時は、利用者さんが50人いらしたのです。自分の思いと皆さんの思いは違い、どういう事業所を選択するのかは利用者さんのほうに権利があり、私たちは選ばれる方なのです。株式会社もNPOも有限会社も社会福祉法人もと、選択肢がたくさんあれば、その中から私たちを選んでくれた人たちに一所懸命やればいいということになりますから、半年遅れて法人格を取ったのです。法人格をとったら、前にいらした人たちが皆戻ってきてくださったのです。
介護保険が始まって20年たちますが、そのころからこの人（Ｙさん）はずっと働いてくれています。やめない人もたくさんいてくれて、その人たちは介護サービスさくらをわかってしてくれています。この間も、「給料のいいところはたくさんあるのに、なぜそっちへ行かなくてここにいるのか」と聞いたら、「自分たちは村居さんのミッションがいいから。自分に合っているから」と言ってくれました。助け合う、学び合うという理念です。

ハリ　ミッションは、助け合う、学びあうということですね。

Ｙ　その頃子供が小さかったのですが、村居のほうが背中を押してくれて、子供中心で家庭のことをまず考えて末永く働ける場所でもあったので、今まで続けてこられたと思っています。家庭を持つ母親の気持ちを一番わかってくれていると思うので。

理長　介護保険が始まって２年ぐらい後に、NPO法人を立ち上げましたが、NPOの本当の活動というのはどういうものなのかを先進国である米国に研修に行きました。2002年の時です。素人同士が集まっていろいろな活動をするのがNPOだと思っていたのですけれども、米国ではプロフェッショナルな人が集まって活動していました。つぶれかかった病院をNPOで買って、そこでお医者さんが働いていたりするのです。NPOだから給料も安いだろうというのが私たちの捉え方だったので、そのお医者さんになぜとお聞きしたら、自分が考えているミッションと一緒だったからここで働いているという話をされました。そばで４～５人が雑談していたので、あの人たちは何をする人なのかと聞いたら、その人たちが年に何回かある補助金申請をやってくれ、大体６億ぐらいの補助金を毎年取っているというのです。驚きました。私たちはNPOを立ち上げるときに、どこのNPOもそうでしたが、働いてくれていたスタッフというかヘルパーさんを10人ぐらい集めて構成員をつくり、NPOを申請し、その人たちを皆理事にしていたのです。代表の私すら何もわかっていなかったので、もちろんその理事の人たちも同じで、私たちはただ介護サービスさくらを立ち上げるための理事で、構成員なのだということだけを考えていました。米国研修を通して、NPOにとっては理事が一番大事で、理事会などいろいろな会議で、補助金などについて、こうするといいよとアドバイスする役割だとわかりました。実際はまだなかなかそこまではいっていないのですけれども、お医者さんや弁護士さん、その団体のことを思って頑張ってくれる人たちが理事で、理事の皆さんの活動がそこの団体の看板にもなるということを学んできました。帰ってきて、２年目に入っていましたが、理事を解散して、お医者や弁護士さん、企業の代表がいたりする今のメンバーに代わったのです。そこから再度NPO介護サービスさくらを見直そうということが始まりました。

加藤　ミッションに賛同してくれるいろいろな方に入っていただいたのですね。その後、どのように発展させていかれたのですか。

理長　今はＹさんのような仲間たちがエリアマネジャーとして４～５人います。

Ｙ　組織図がここにあります(資料をいただく)。

理長　エリアマネジャーの下にこれだけの事業所があるのですけれど、初めは私から全部につながっていたのです。五つぐらいの事業所を直接という感じです。それでもやれた時代ではありました。最初に、ヘルパーの事業所をオープンしました。デイサービスは、その頃は自分の家だったのですけれども、自分の家は大通りから二本ぐらい引っ込んでいたので、なかなか皆さんに伝えることもができなかった。私自身が広報する能力も何もなかったので、人通りがあって皆さんの目につくところへ行かなきゃいけないと思いました。そこでＮ商店街でやることができました。Ｎ商店街に出て行くときには、商店街活性のための補助金があり、200万円ぐらいいただきました。空き店舗を一つ開けて、そこでデイサービスと訪問介護をやり始めました。でも、介護保険のためにはケアマネジャーが要るのですね。それで一所懸命勉強して、２年でケアマネの資格を取りました。うちのスタッフたちも「私も取る」、「私も取る」と言ってケアマネの資格を取り始めてくれました。そうするとケアマネ事業所とデイサービスと訪問介護が利用者さんを見ていて、福祉用具のお店をつくりたいと思うようになりました。脳梗塞になって片方の足が麻痺したら、片方の足に装具は要るけれども、もう片方の足には必要ないのですね。だから、片方だけ売っている高齢者の靴を置けるような福祉用具のお店を始めました。それは閉じてしまいましたが。またケアマネを独立させるため、商店街を含め四つ始めました。

Ｙ　その頃に障がい者支援法ができたので、障がいにも参入しました。

理長　ある人から障がい者のほうは難しいからNPOにはできないよという話がありましたので、NPOだからこそできる障がいの人たちへのお世話があるのではと考えました。そのときに、隣のビル、Ｔ電の築50年以上の古いビルなのですが、そこの場所をお借りして、障がいのある子供たちの放課後とデイサービスが始まっていくのです。

ただ、その放課後とデイサービスをやりながら介護保険での収入を得て

いても、私たちは要支援１・２とかボランティアとかがほとんどでしたから、ヘルパーさんが１軒のお宅に行くと１対１ですので、売り上げ的には家賃が払えるかどうかでした。正直な話、その頃は持ち出しのほうが多かったです。その後、要介護２・３になったということで、少し収入があるかなと思ったところ、皆さん施設に入っていくのですね。まだ自分は自宅にいたいという人たちが、子供たちが探してきたのだからもう行かなきゃいけないと言って、泣く泣く入るのです。そういう人のほうが多かったので、自分たちでつくりたいと思ったのですが、お金はありませんでした。そんな時、商店街のデイサービスや訪問介護の事業所で、トイレが壊れた、あそこが壊れたというのを直してくれていた地元のＯ建設さんからある話が来たのです。Ｏ建設さんは我々がデイサービスを始める時も、ボランティアでリサイクル品を売っているところから流し台を安く買ってきて取りつけてくれたりしてくれていました。そういう関係でしたので、私たちが施設をつくるときには絶対Ｏ建設さんに頼むからねという話をしていました。それで、Ｏ建設さんがかかわっている人が、この場所にマンションを建てるということで、既に図面もできていて、銀行さんに融資を受けに行ったのです。そうしたら「今からマンションを建てる人たちには融資をしない」と言われて、がっかりして帰ろうとしたときに、「福祉施設だったらいいですよ」と言われ、そのことをＯ建設さんに話したら、Ｏ建設さんが、福祉施設だったら話をするところがあるからといって私に話を持ってきてくれたのです。建てたいという人と福祉施設をつくりたいという私たちが一緒にＯ建設さんの事務所で会って、その日に決定しました。大家さんもとてもいい人で、「福祉施設には自分たちも携わったことがないので、あなたたちの思い通りの絵を描きなさい。建築費は全部出すから」と言ってくださったのです。

加藤　ありがたい話ですね、すごい話ですね。

Ｙ　いいタイミングでした。

理長　いつかやりたいと思っていたのですけれども、そのときはどういうものが利用者さんに喜んでもらえるのかということわかりませんでした。全国にNPOがいっぱいありますので、施設に関する情報を得て、見学に行きました。その関係で、色にこだわるＫさんを紹介していただきまし

た。おかげで建物の中に、間違いない色を選ぶことができました。おトイレの床は柔らかい感じの黄色で、それが蠕動運動を活発にします。それと、ここは小さな建物なのですけど、３階がサ高住（サービス付き高齢者向け住宅)、２階がグループホーム、１階が小規模多機能で、複合的にできているのがすごく珍しいのですね。10年たつのですけれども、いろんなところから見学にみえます。

複合的なものをつくるつもりはなかったのですけど、認知症の人も入れたい、デイサービスの人たちも入れたい、元気な高齢者の人たちの住宅もあったらいいねということで、複合的になっていきました。３階の住宅は、前は高齢者専用賃貸住宅(高専賃)という名前でしたが、サ高住に変わっていきました。高齢者専用賃貸住宅だと１部屋につき50万円なのですが、サ高住だと100万円の補助金がいただけます。グループホームも、名古屋市だけなのですけれども、準備金として１部屋につき60万円がもらえました。18部屋あります。１階はスケルトンにして、ここには小規模多機能として3,000万円充てますというのがあったので、それで作りました。

本当はこの建物全体で１カ月200万円という家賃が要るのですけれども、20万円安くしていただいて、今は家賃を１カ月180万円払っています。それで、私の計算では、３階が15部屋、２階が18部屋で、その家賃を合わせると３階と２階だけで225万円になるので、満室になれば45万円ずつ私たちのほうに入ってくるのです。何とかして皆で頑張ってここを満室にしましょうと言っていたら、７割入ってくれたのです。７割入ってくれると、私たちの持ち出しはゼロになります。２階と３階だけでそうで、１階にさくらの事務所と小規模がありますが、ここの店舗代はなしと計算すると、高くないなとなります。

名古屋市では、土地を買って建物を建てたら３億円からのお金が要ります。土地代だけでも何億とするので。NPOだけではなくて、これだけ時代が激しく動き、少子高齢化で子供も少なくなってくるというときに、次の世代に変わって、こうしておけばよかった、ああしておけばよかった、借金だけが残ったということになるよりは、皆で頑張って家賃がもらえるようにしていくことが重要です。25年したときに、ここは高齢者

施設からまた別のものになっていくかもわからない。だから、借金のある財産は作りたくないなと思っています。

加藤　そうしていかないと継続性がなくなりますから。

理長　うちは借金ないということです。三つほどの銀行と取引させていただいていますけれども、私たちは健常な、それこそいい運営をしていると思っています。

加藤　大事なことです。働いている人たちに対する責任がおありになるわけですから。ところで現在、発達障がいのお子さんのためのサポートスクールもやってみえますが、それは、どのように発展されてきたわけですか。

理長　障がいを持ったお子さんを抱えながらヘルパーの仕事をしている人たちがいて、「実は私、こういう子がいるのです」と言われたときに、私自身がこれをやるあれをやるではなくて、あなたたちが何をやりたいかということで決めました。皆にやる気になって気持ちよく長く働いてもらうためには、やりたい仕事をやらないといけない。N商店街でやっていた時に、「あなたたちがかかわっていることでそういった情報をいっぱい持っているのだったら、NのT電の跡地のところでやってみよう」と言ったのが最初だったのです。

助け合う、学び合う、育ち合うというのが私たちのミッションです。互いが育ち合う、自分の中の知らない能力を生み出す、ここにいて、自分の知らないいいところを見つける場でもあってほしいのです。そういうことが芽生えてくると、もっといい仕事ができるので、自分に合ったところでその仕事をやってもらう。そうすれば能力もどんどん上がっていくと思うのです。

ハリ　なるほど。では、これまでのお話の中にもありましたが、介護サービスさくらの経済的な仕組みはどのようになっているのかを教えて下さい。また、どのようなプロセスで事業が増えていますか。

Y　市の補助金と介護の準市場型です。認知症カフェは、Aのほうで助け合い事業をやっていて、地域性があるので、まだなかなか進んではいないのですが、２階部分に小規模多機能があって、１階部分のスペースを利用して認知症サロンをやっています。今後、認知症サロンに力を入れていきたいなと思っています。基本サロンではお金はいただかないので。

誰でも気軽に立ち寄っていただけることを目指そうと思っています。

理長　今のところ無償でやっています。近所のお野菜だとかを持ち寄って、ボランティアの人たちはそれをわかっているので、コーヒーを沸かしたり、お菓子をつくったりしながら対応してくれています。まだ未就学児の子供さんを抱えたお母さんが、夜勤のご主人がいるので小さな子供と家にいられないからとその辺をうろうろしていたときに、ここは何をやっているところですかと尋ねられて、あなたのような人たちが来る場所ですよと言ってから、あそこは小さなお子さんの豆サロンになっています。

加藤　ニーズに合わせて柔軟に対応されているわけですね。

Ｙ　村居はずっとニーズに対応してきています。ニーズがあればすぐ動きます。

理長　地域のニーズを引き上げて、困っていてこういうものがあったらいいなというものをつくるのがNPOの役割だと言い続けています。私は代表が勉強しなきゃいけないということを痛感していました。アメリカにNPOを学びに行き、スウェーデンの高福祉高負担も学びに行きました。税金が25％でしたから福祉が充実していました。オランダもそうですけれども、収入に応じて40％ぐらい払っている人たちまでいるのです。そこで、「そんなに税金を払っていて働く意欲をなくしませんか」とお聞きしたら、「国はうそをつかない」と。大学も無料です。貯金もしなくていいので、皆気持ちよく税金を払います。それこそ「ゆりかごから墓場まで」です。スウェーデンで地下鉄、路電、バスなどの乗り物を体験して、日本は30年遅れているなと思いました。地下鉄に乗りたいとき、エレベーター、エスカレーター、階段の３点セットがそこにあるのです。日本が地下鉄では、わけのわからないところにエレベーターができて、どこにあるのという感じでした。まだエスカレーターがなくて、階段だけのところもあります。あのとき、スウェーデンの３点セットは本当に古くて、20年も30年も前にできたものなのだなとわかりました。

ハリ　行き渡っているのですね。

理長　そうです。その後、オランダに高齢者住宅を勉強したいと思って見に行ったのです。グループホームをつくりたいと思っているときだったので。オランダでは、サウナがついていて、お客さんの部屋があって、リビン

グと寝室があってというのが当たり前でした。市営住宅のようです。それに対して、日本は四畳半でした。70年も80年も生きてきた人が、日本は春夏秋冬という四季があるのに、四畳半で服をどこに置くのかということですよね。玄関もない。開けたらすぐに部屋。ベッドを一つ置いたらテレビも見られない。人間扱いしていないと私は思ったのです。そういうことを厚労省でしゃべたり、いろいろなことをやらせてもらっているうちに、四畳半ではなくて六畳でもいいとかいうことになっていきました。私は八畳の部屋をつくりました。

ハリ　*私も、日本の部屋を見て、本当に狭いなと思いました。研究留学で去年カナダのモントリオールに行き、そこでもグループホームを見ました。いい場所で、きれいなビューが見えるように作ってあり、皆おしゃれしてベランダでお茶を飲んだりしていました。*

理長　オランダでは、特別養護老人ホームをつくるときの条件として、１階をレストランにしなさいとなっているそうです。だから、地域の皆さんがここのところに来られる。それと、施設に入っている人たちは、おなかがすいたら１階に降りて食事をする。今の日本の施設では、本人のおなかがすこうがすくまいが、時間が来たら皆どんどん運んでいくとなっていて、うちらでもそこはそうなってしまいます。

Ｙ　今後目指したいところです。

理長　地域の皆さんも高齢者の人たちと親しんでいただけるし、高齢者の人も季節感がわかりますよね。中に入っているだけだと季節感もわからないのですけれども、皆さんが来ることによって、同じテーブルで食事をしたりしていると今の流行がわかる。いろいろなものを自分たちも取得できますものね。

ハリ　*ソーシャル・ビジネスは社会的成果と経済的成果の両立が重要とされていますが、実際に事業をおこなっていて、どのような点が難しいと思われますか。どう両立を図っていますか。*

理長　私たちは本当にお金のない団体なので、国のやろうとしていることに付く補助金を利用していかなければなりません。私は市民協の代表もしていますので、厚労省に行ったり来たりもでき、国が今何を考えているのか、何を次にやろうとしているのかというのが、少なくともほかの人た

ちより４カ月ぐらい早くわかるというのがあるのかなと思います。そういうことで、代表者会議や全体会議のときに、常にそれについて話していくと、そのうちに、これはたしか４～５カ月ぐらい前に村居が言っていたことだよなとなります。だから、国が求めていることをどこよりも早く先取りし、準備できることはどんどんやっていくことができます。

今回900万円ぐらい税金を払うのですけれども、私が皆に言い続けていることは、利益があったら、３分の１は地域に貢献し、３分の１は介護サービスさくらの次の事業のためにとっておき、そして３分の１は働いているスタッフに還元しなさいと。最初の頃は、NPOですので、給料は何とかぽちぽち払えるようになっても、ボーナスなんて払えませんでした。

Ｙ　介護保険とか障がい事業といった福祉事業って、入ってくるものは決まっていますよね。ですので、村居が本当にいろいろアンテナを張ってくれてはいるのですが、私たちもどうやって少しでも利益を上げてスタッフに還元できるかと考えます。スタッフを守らなければなりません。

理長　今うちのスタッフが230人。

Ｙ　皆さん長く働いてくれています。人がやめないNPOで有名です。

理長　地域で皆さんがこういうものがあったらいいなというものを考えています。Ａは、Ｕの建物で２階が銀行だったのが撤退して、銀行が撤退したら１階の商売屋さんの店舗も皆撤退していって、１階と２階が空いたまま７年たっていたのですね。それで、Ｕの部長さんがここへみえて、あそこを何かにしてくれないかと言われたのです。名古屋市にそこの場所で小規模多機能をやりたいのだけと聞いたら、何をやってもいいと言われて、やることになりました。小規模多機能のお金が3,000万円つくので、それで全部改修ができました。１階は地域の皆さんが使っていただくための支援をするということで、そこのところには1,000万円ぐらい出たので、１階も全部気持ちよく改修できました。だから、皆で１億2,000～3,000万円ぐらい、名古屋市を通して国からいただいています。それのおかげで、何とかやれています。

私は、もしだめになったら自分が裸になるだけです（笑）。でも、それにスタッフが全員ついてきてくれた。いつもお昼を一緒にするのですが、

私は10年先20年先の夢を語るのではなくて、５年先の夢をいつも語っていたのですね。そうすると、４年、３年、２年、１年となると、村居が言っていたことはこれだったのだと実現していく。そういうことが幾つか重なったので、皆それについてきてくれた。NPOの人たちに「一緒にやろう。あなたたちもやりなさいよ」と言っていた頃は、「いや、NPOだからこれでいいのよ。あなたたちは起業型NPOよ。どちらかといったら株式会社じゃない」と、そういうことを言われながらきましたけれど。働いている人たちや、その人の家族の将来にもかかわってくるので、お給料ボーナスのときにも気持ちよく少しでも出せるようになりたいので、ミッションに従って事業はやります。軸さえしっかりしていれば皆ついてきてくれるはずだからというので、ずっとやってこられたと思います。しかし現実には、「NPOにはそんなものだめだよ」と言って、皆反対することもありました。理事さんたちにまで責任が及ぶので、怖がるのです。ですから私は、NPOの理事の改正のときに、代表がすべての責任をとるか、それとも連帯責任にするかという二つの選択があったのですが、私一人が全部の責任をとるというのを選びました。だから皆も安心してくれていると思うのです。

ハリ　*寄附金は募集していますか。会員制度はありますか。*

理長　寄付金はあります。本来はNPOですので、会員同士の助け合いということで、入会金が1,000円、年会費が今までは6,000円だったのですけれども、いろいろあってもう少し下げようと思っています。それから、NPOで働いているスタッフだということを意識してもらわなきゃいけないので、スタッフにも払ってもらっています。あと、介護保険だけ使っている利用者さんはいただかないのですけれども、介護保険を使いながら助け合いを使っている皆さんにも。助け合いは、病院にお連れしたりとかするときに利用してもらうものです。

Ｙ　これはずっとこのころから、20年変わっていないのです。時給1,750円です。皆さんびっくりされます。ほかのところは3,000円とか4,000円とかとります。

理長　これは、東京が2,000円、神戸のコープさんが1,500円だったので、間をとって1,750円にしようということで決めました。35年間この値段です。

ハリ　ボランティアはどうやって募集していますか。

理長　いろんなボランティアさんがいます。ここは多目的で、地域の皆さんにお貸ししています。パンの販売とか、社交ダンスとか、いろんな人たちが夜も昼間も使ってくださっていて、その人たちがこのように皆さんにボランティアをしてくださって。（写真を見せてくれて）この人は赤ちゃんが生まれたときからスタッフで、子供を見ながら常勤さんで働いていて。ベビーベッドも事務所に持ってきて。そうやって皆で育てています。ケアマネも何人も子育てしました。この子なんか、ベビーベッドをさくらがレンタルして、生まれたときからここまで育ってきたのですよ。これはうちの娘なのですけど、最初の子供がここで。ママは仕事へ行っているから、このおばあちゃんたちが育ててくれる。この子を怪我させてはいけないと、このおばあちゃんが抱っこしているとき、脳梗塞で全く動かなかった手が動き始めたのです。そのママが理学療法士なのですが、一所懸命やっていたのに動かなかった腕が動いた。母性本能というか、子供を落としちゃいけないという気持ちがそうさせたのです。県の職員の人たちも研修で５日ぐらい来るのですけど、皆びっくりされます。

理長　雇っている掃除してくれるスタッフはいるのですけれども、２階も３階もそうですけれども、認知症の高齢者だから、できるだけご本人にかかわってほしい。だから、洗濯だとかで少しでも目を離すことがないように、18人だけのところですけれども、外に洗濯を頼んでいます。スタッフが洗濯をしていません。その時間があったら、利用者さんのほうに向き合ってほしい。よそから来た人は、洗濯とかがないのが不思議だと言われますが、ここは皆、そういう専門の人がやる。それから障がいの人たちも、現在４階で就労支援ということで掃除をやっています。その人たちが、チラシを折ったりとか同じことばかりやっているよりも、時々気分転換にこういったところへ来て、ガラスをふいたりとか、ほんのちょっとしたところをその人たちにやっていただいています。外から来ている業者と同じ金を出しなさいと言ってあるので、それで障がいの関係者にも喜んでもらっています。当たり前のことです。

加藤　皆、その当たり前のことができないのだと思います。

Ｙ　今後も、障がいも高齢者も子供も、皆が見慣れた町でずっと一緒にと考

えています。

理長　共生ですね。

加藤　まちづくり、地域づくりをしていらっしゃるとも言えますね。

Y　そこを目指していきたい。まだまだ途中なのですが、それに向かっていきたいと思っています。これも村居の思いなので。

ハリ・加藤　いい話をたくさん聞けました。ありがとうございました。

Ⅲ　インタビュー後記

NPO法人介護サービスさくらはストーリーがある。社会起業家である理事長が、名古屋市で初めての中流家庭に対する個人のお助け事業「村居介護サービス」を始め、有償ボランティア団体「さくら」を経て、NPO法人介護サービスさくらを設立した。さまざまな壁にぶち当たっても、常に前向きに地域の人に貢献していくという姿勢には頭が下がる。理事長のミッションとその行動力に共感するスタッフと共に、地域の課題をすくい上げ、いち早く対応していることには、たいへんなパワーを感じさせられる。ミッションを軸に事業を横展開しているが、それはスタッフの抱えるニーズにも対応して始めたことでもある。スタッフが働きやすい環境を作り出していることにより、さまざまな社会的成果を生み出している。どこよりも早く地域のニーズに応えることが経済的成果に結びついている。コミュニティ・ビジネスの色彩が強いソーシャル・ビジネスの事例である。

謝　辞

NPO法人介護サービスさくらの理事長・村居多美子氏、エリアマネジャー・サービス提供責任者・脇野利香氏にはたいへん貴重なお話をしていただいた。深く感謝する次第である。なお、本稿に事実誤認があれば、それは筆者の責に帰すべきものである。